

早稲田大学大学院日本語教育研究科

修 士 論 文 概 要

論 文 題 目

日本語音声教育実践における学び
—非母語話者実習生へのインタビュー調査を中心に—

千 仙永

2011年9月

第1章 序論

本研究は、非母語話者の日本語教育実習生（以下、実習生）が音声教育実践（以下、「実践」）を通してどのような「学び」を得たかを明らかにしたうえで、非母語話者日本語教師による音声教育の在り方を考えることを目的とする。

筆者が非母語話者教師による音声教育に注目するようになったきっかけは、実習生として受講していた「実践」での「学び」である。「実践」は、筆者にとって「音声教育とは何か、音声教育における教師の役割とは何か」を考えさせられるものであった。「実践」を受講する前の筆者は、いわゆる「発音矯正」が音声教育だと思っていた。そして、音声を教える側には学習者の発音を聞いて正しいかどうかを判断する基準とモデル音声を提示する能力が必要ではないかという不安を持っていた。しかし、「実践」を重ねるたびに、音声教育において、学習者の音声に関する「意識」を促すと共に、音声学習の機会を提供することが大事であると気づくようになった。新たな音声教育の在り方において、筆者は自信を得るようになった。このような「学び」を日本語教育に携わっている非母語話者教師と共有したいということが研究動機である。

先行研究を熟読しながら、筆者の問題意識はより深まった。従来の日本語教育では「音声を教える」のは、母語話者教師の役割とされている。その理由には、「モデル音声」の提示が可能である点が挙げられる。しかし、海外における日本語教育現場を考えると、母語話者教師より非母語話者教師が占めている割合が多い。前述したように、音声を教えられるのが母語話者教師であるならば、海外における日本語学習者には音声教育を受ける機会は少なくなるのではないであろうか。

音声教育は母語話者のみの役割ではなく、母語話者教師と非母語話者教師の双方が行っていく課題であると考え。両者が共に日本語音声教育を実施していくためには、音声教育がどのようなものであるべきなのか。本研究では、特に「非母語話者」といった観点から日本語音声教育の在り方を考える。

本研究では、「実習生が『実践』を通してどのような『学び』を得たか」を調査、分析、考察した。「学び」とは、単なる音声・音韻知識や指導方法、つまり知識やスキルの獲得に限らない。実習生が「実践」に参加することで、日本語音声教育に関する考え方が変容していくことと、教える側として成長していく過程を「学び」と捉える。

第2章 研究方法

第2章では、研究対象、調査方法、データ分析方法を述べた。

「実践」は、日本語教育学を専門とする東京都内の某大学院の教育実践科目の一つであり、音声教育に特化したものである。筆者は2009年度秋学期、「実践」を受講し、「音声教育とは何か、音声教育における教師の役割は何か」を考える過程において、「非母語話者教師による音声教育」を自分の問題意識として成長させていった。つまり、本研究の問題意識は「実践」と筆者との間で生まれたものであり、それが「実践」を本研究のフィールドに選択した理由であった。

本研究では、2つの調査を行った。まず、毎回の実践でボランティアとして参与観察を行った。また、インターネット上の補助教材作成過程及び実践報告シートの観察を行った。観察した様子は、すべてフィールドノーツに記録した。

次に、インタビュー調査を行った。インタビュー協力者は以下の4名の実習生である。

仮名	教師経験	性別	年齢	国籍	母語
メイ	なし	女	20代	中国	中国語
ジナ	家庭教師、私設の日本語学校、会社	女	20代	韓国	韓国語
ユエ	大学のサークルで日本語指導ボランティア	女	20代	中国	中国語
ルイ	なし	女	20代	中国	中国語

「実践」でどのような「学び」を得たかを、半構造化インタビューで語ってもらった。インタビューは、各実習生に対して2回ずつ行った。1回目は学期途中、2回目は学期が終わった後である。インタビューにかかった時間は、2回合わせて1名当たり約2時間半から3時間程度である。すべてのインタビューの内容はICレコーダーに録音し、文字化した。インタビューの際にもフィールドノーツをつけた。

本研究では、非母語話者日本語教師による音声教育の在り方を考えるため、「学び」という観点から実習生へのインタビューデータとフィールドノーツを分析した。

第3章 分析

第3章では、「学び」という観点から各実習生のインタビュー文字化資料とフィールドノーツの分析を行った。個人の背景、個性によって「実践」で得る「学び」も違ってくると思うため、実習生の学びを一括りにせず各節に分けて各個人の分析を試みた。

3.1 メイさんにとっての「実践」での「学び」

メイさんは、「実践」を受講した一学期間を通して、日本語の音声に関する〈意識〉を働かせることに集中していた。メイさんの語りから、音声教育において〈意識〉というものがいかに重要であるかが分かった。非母語話者教師が音声指導を行うために、本当に大切なのは、メイさんの語りから何回も伺えたように、音声に関する〈意識〉を働かせることにあるのではないか。

3.2 ジナさんにとっての「実践」での「学び」

ジナさんには〈訛りがある発音〉を聞くと、〈なぜそのように発音するのか〉という疑問を持ち、ジナさんにとっては理解しがたいことであった。そして、〈訛りがある発音〉で話す人自身もその事実を知っているだろうと思っていた。しかし、「実践」に参加して学習者とやり取りをする中で、その考えは変わっていく。また、あるとき「実践」以外の場面で、ジナさんの友人がアルバイト先の店長に発音を指摘され驚き、さらに傷ついた様子を見て、そのような状況に置かれている学習者を理解できるようになったのである。ジナさんにとって「実践」は、「日本語教育実践者」として学習者への理解を深めさせてくれたと言えるであろう。

3.3 ユエさんにとっての「実践」での「学び」

ユエさんが持っていた教師像は〈完璧〉なものであり、音声教育のイメージは、教師が〈正しい音声〉で発音し、学習者はそれを繰り返すというものであった。したがって、音声教育場面における学習者の質問に対しては〈正しい答え〉を与えなければならない。このように自分が設定した理想のイメージの中で、苦しんでいたユエさんだったが、「実践」を通して徐々にその教師像も音声教育のイメージも自分の色に染めていく。ユエさんが「実践」で新たに得た教師像と音声教育のイメージとは、日本語の発音のしくみや音韻知識を学び、そのような知識をもとに学習者の「意識」を促すことである。その中で、自分にできる役割とは何かを考えていくうち、学習者に〈正しい答え〉、〈正しい音声〉を与えなければならないという不安は徐々になくなっていった。

3.4 ルイさんにとっての「実践」での「学び」

発音に関して〈通じれば良い〉と思っていたルイさんだが、「実践」を通してまず一人の日本語学習者として発音に関する意識を高めていった。そして、教師を目指している実習生として「専門性」を高めていこうとする様子が見られた。そのようなルイさんにとって音声教育に関する不安や葛藤は、学習者からの質問に答えられなかったときにやってくる。ルイさんは自分自身を〈発音の方法が指導できる〉一人の「日本語教育実践者」として捉えることによって乗り越えようとしていた。そして、そのために今後も絶えず発音を学んでいきたいと語っていた。将来、ルイさんが中国の日本語教育現場で日本語を教えるときには、おそらく自分で工夫してきた発音の方法を学習者に伝えるであろう。ルイさんにとって音声教育は、ルイさん自身への〈挑戦〉であり、〈プライドをアップ〉していく道であったことに違いない。

第4章 考察

本章では、第3章での各実習生の語りにおける分析を通して、「教える側としての成長」と「音声教育に関する考え方の変容」という両方の「学び」の観点から総合的な考察を行った。まず、各実習生が「実践」を通してどのような「学び」を得たのか考察した。

次に、「学び」の過程から浮かび上がってきた「葛藤」の様子を述べた。実習生には「理想の教師像によるプレッシャー」が見られた。理想の教師像とは「教師は正しい答えを与える存在」といったものであり、「音声指導には正しいモデル音声の提示が必要である」というビリーフは、このような現状をより深刻化させていた。また、理想の教師像は実習生の学習経験から生まれることが明らかになった。さらに、「非母語話者」としての不安を感じる特徴が見られた。「直観的センス」を持ち、「正しい音声」で話すと言われる母語話者教師像に自分を当てはめて、そこに至らない自分に「非母語話者」というレッテルを貼っている葛藤の様子もあった。しかし、このような考え方は実態のない理想像に自分を当てはめてしまうことであり、このような考え方を捉え直すべきであると論じた。

最後に、「葛藤」から「成長」に繋げるためにすべきことを提案した。まず、非母語話者教師が音声学習経験を持つことが音声指導において貴重な助言、教育と繋がっ

ていくと論じた。次に、音声教育において新たな観点の「モデル」提示が必要であり、それは非母語話者教師だからこそできると唱えた。

第5章 結論

本研究は、「実践」における実習生の「学び」を分析、考察した。その結果を踏まえ、本研究の目的である非母語話者日本語教師による音声教育の在り方をまとめた。

まず、実践を通して実習生が成長していく変容過程、つまり「学び」を、日本語教育現場に携わる非母語話者日本語教師にもそのような機会を与えることの可能性を述べた。次に、非母語話者教師にとって音声とは何か、また非母語話者教師による音声教育の在り方とは何かを論じた。従来の「発音矯正」のイメージから抜けて、「モデル音声」にとらわれないこと。そして、教師自身の「音声学習経験」を大事に思って、学習者の「意識」を促していくこと。それが、非母語話者教師による音声教育の在り方ではないか。

したがって、本研究における今後の課題は次の通りである。実習生が今後日本語教師になったときに、「実践」で得た「学び」を彼らの教育実践の中でどのように生かしているのか、追跡調査を行うことである。次に、本研究における4名の実習生は教師経験が浅い「日本語教育実践者」であるという特徴があった。もし、長期間、日本語教育現場に携わっていた教師を対象とするならば、同じ「実践」に参加していたとしても、「学び」の質や特徴は異なるのではないかと予想される。したがって、教師の背景や経験を踏まえたうえで、それぞれの教師が音声教育を通してどのような「学び」を得ていくかを明らかにしていく課題も残されている。

おわりに、本研究で行ったインタビューを通して、非母語話者である筆者と実習生たちが音声に対して持つ不安と悩みに苦しむ姿に直面した。それぞれが持つ音声に関しての不安、悩みに共感しつつ、それを乗り越えるためには何が必要であろうかと考え続けていた。筆者と実習生たちはもしかすると「非母語話者」という括りに自分たちを縛り、実態のない「正しい音声」、「モデル音声」を想像の中に作り出し、つい不安にとらわれていたのではないか。その伸び悩みから脱出するためには、「非母語話者」という括りを乗り越え、自分なりの自信を持つことができる「一人の日本語教師」と

して音声教育に関わっていくべきだと考える。今後は、筆者自身が「一人の日本語教師」として「実践」で得た「学び」を生かして音声教育を行い、音声教育の在り方を考えていきたい。そのような経験を踏まえたうえで、今後の日本語教員養成課程または日本語教師研修に対して提言ができるのではないかと考える。